

# ぶんげい 分科会

手のひらサイズの文学をあなたに

ぶんげい @w\_massken\_b

スマホを持った手が、スカートの下に伸びてきた。満員電車だったので、手の主はわからない。怖くて、声が出なかった。ただ、金の派手な腕時計が印象に残った。生徒指導室に行って、事情を話した。「怖かっただろう」先生は親身に話を聞いてくれた。その手首に巻かれた金の時計が、ギリリと光った。

○ □ ▼ ◇

ぶんげい @w\_massken\_b

死体占いを聞いたことがあるだろうか。十年間身を捧げた異性の死体を媒介として霊の声を聞く。あと一日、あと一日で長年の夢が叶う。これまで私は奴隷同然だった。でも仕方がない、これが最短ルートだったのだから。胸の高鳴りが抑えられない。裁きと啓示。血よ、肉体よ、さようなら、私の愛しい夫よ。

○ □ ▼ ◇

ぶんげい @w\_massken\_b

「ねえ、結婚しろ」  
「ダメだよ」  
私が何度言っても、彼は頷いてくれない。  
彼は20代後半の保育士。イケメンで誰にでも優しく、非の打ち所がない。いつも私の頭を優しく撫でてくれる。しかし、何度結婚を迫っても断られてしまう。  
「私の何がいけないの？」  
彼は言う  
「だって、君はまだ5歳だよ？」

○ □ ▼ ◇

ぶんげい @w\_massken\_b

水槽に土を入れて、ダンゴムシを数匹飼っていた。水槽の上から彼らを観き込む。彼らは、僕に飼われていることに気がついているのだろうか。

あ。

そのとき、僕はハッと天井を見上げた。天井のその先の、遙かな空を思い浮かべた。  
そこでは、とてつもなく大きい「何か」が、僕らを覗き込んでいた。

○ □ ▼ ◇

ぶんげい @w\_massken\_b

ツリーの下の娘の手紙。表には「サンタさんへ」と。いつからか欲しいものを直接言ってくるようになったから、手紙なんて何年ぶりだろう。期待に胸を膨らませ開くと  
『現金。諭吉であれば尚良い』  
……用意すべきは『学問のすゝめ』か『文明論之概略』か。悩みに悩んで慶応の赤本を置いた、娘17歳の冬。

○ □ ▼ ◇

ぶんげい @w\_massken\_b

昔からこの日は大嫌いだった。自分の誕生日よりも、しょうもないイベントに浮き足立つ友人たちにムカついたし、ないがしろにされている様に感じた。  
「はい、誕生日でしょ？ これあげよう」  
仲の良い女子からもらったチョコに目を丸くする。「本命だからちゃんと食べてね」  
今年最高の誕生日だ。

○ □ ▼ ◇

ぶんげい @w\_massken\_b

「あ、UFO！」  
「ばっかだなあ、お前。まだUFOなんて信じてんの？」  
「な、な、信じてるわけじゃない、なあ。ちょっと口が滑っただけだし」  
「だよなあ、ガキじゃあるまいし。トナカイとソリに決まってんじゃない」  
「え？」  
「いや、日付考えろよ。サンタだよ、サンタ。今日クリスマスだろ？」

○ □ ▼ ◇

ぶんげい @w\_massken\_b

一目惚れをした。いつもの帰り道の途中、俺は出会ってしまった。小麦粉をぶっかけたかのように色白く、指で弾くと折れそうなほどの細身、それでいて内から滲み出る肉食系の匂い。俺にとって理想そのものだった。  
え、何に出会ったかって？  
それはレトロな純喫茶「風車」の新メニュー、カルボナーラさ。

○ □ ▼ ◇

ぶんげい @w\_massken\_b

ツリーの下の娘の手紙。表には『イチタさんへ』と。不思議に思ってた「だって、サンタさんはひとりじゃないのか？ 誰かいないのか？」  
「だって、サンタさんはひとりじゃないのか？ 誰かいないのか？」  
数字を10まで数えられるようになった、娘4歳の冬。

○ □ ▼ ◇

ぶんげい @w\_massken\_b

また一人、弟子がやめていった。「家族にもう限界だと言われまして」深々と頭を下げた弟子に向かって、「このご時世だ、仕方ねえ。頭上げな」それだけ言って見送った。「花火師が下を向いたら終わりだ」誰もいなくなった作業室で下唇を噛みしめる。「暗い世の中でも、上を向けるように花火を作るんだ」

○ □ ▼ ◇

ぶんげい @w\_massken\_b

アミコは鍋にパスタを投入しタイマーを8分に設定した。アルデンテの長さでよく喧嘩したな……。湯気に混じる微かな麦の香りと共に思い出した人の記憶は、すぐさまタイマーの音でかき消される。試しに一本つまむとまだ少し芯が残っている気がした。やっぱり私のアルデンテの方がちょうどいいじゃんか。

○ □ ▼ ◇

ぶんげい @w\_massken\_b

ぐるぐるぐる。おっと、パスタをフォークで巻いたら目が回ってしまいましたよ。「おい、箸を持ってきてくれ」こりやまたやっちゃった。あいつはもういないんだ。台所に行って食洗機を開くと、中には夫婦箸が並んでいた。妻が入れたであろう食器には、僕の好きなトマトソースがついていた。

○ □ ▼ ◇

ぶんげい @w\_massken\_b

「将来の夢はサンタさんです！」  
そう語ってからもう20年。今の俺は中学受験の塾講師。皆に夢を与えたいと思っていたのに、受験戦争という現実を見せつけるなんて皮肉なものだ。でも、第一志望に合格した子供の笑顔を見ると、この仕事も悪くないと思える。現実を見ながら幸せになることもできるのさ。

○ □ ▼ ◇

# 賢い娘と



## サンタを

### 語る

「ねえママ、サンタさんっているの?」

今年6歳になった娘は、小首を傾げ上目遣いで尋ねてくる。自分の可愛らしさをよく理解しているのか、大きな目を宝石のように輝かせてこちらを見ている。あざとい。我が娘ながら恐ろしい。この子がキャバ嬢だったら無限に貢いでしまうだろう。というか、貢ぎたい。

そんな可愛い娘から、親が困る質問ランキング第2位の質問である「サンタの正体」が飛んでくる。ちなみに1位は「子どもはどうやってできるか」、3位は「飛行機はどうやって飛んでいるか」だ。全国の親はこの質問に對する完璧な回答を用意しておくことを勧める。

「いるよ? だって去年も一昨年もプレゼント貰ったでしょ?」

とりあえず、無難な返答。並の子供なら「うーん、まあそっか!」と納得し、おやつでも食べて忘れてしまうだろう。しかし、我が娘は一味違う。好奇心の塊である彼女は、ちよつとやそつとじゃ納得しない。

「えー、でも変だよ! サンタさんは戸締りしてるお家にも入ってきて、プレゼントを置いていくでしょ? そんな、ドラえものの『オールマイティパス』みたいなことできたら、普通は泥棒しちゃうよね? やっぱ変!」なるほど、我が娘は6歳ながら少々賢いようだ。唯一指摘する点すれば、「オールマイティパス」はどこにでも入れる通行証であり、深夜の家に、誰にも気付かれず忍び込むための道具ではないことくらい。そこは「通りぬけフープ」かな。

とはいえ、娘の言っていることは正論だ。私もそんな能力があったら、クリスマスプレゼントなど買わずにスーパーから拝借する。なんならもう一生働かない。はて、いかに返答したものか……。少し考えた私は、簡単な嘘で誤魔化すことにした。

「実は、サンタさんには試験があってね。綺麗な心を持っている人じゃないとサンタにはなれないの。だから、泥棒しようと考える人はそもそもサンタになれないのよ!」

我ながら悪くない返答だ。これならサンタが盗みを働かない理由として十分だろう。しかし、娘はまだ納得していないようだ。愛らしい眉をひそめ、口を尖らせ、腑に落ちない顔をしている。

「でも、心が綺麗か何で判断するの? いくらでも嘘つけちゃうじゃん!」

当然の疑問だ。しかし、その回答も既に用意してある。

「ふいっ、簡単よ。サンタさんは子どもがいい子が悪い子が調べて、いい子にだけプレゼントをあげているでしょ? これは、サンタクロスが良い心を見分ける能力を持っているからのよ。あなたもいい子にしていると、今年のプレゼントを貰えないかもよ?」

6歳児が大人を論破しようだなんて10年早い。私はドヤ顔で答えた。最後に「いい子にしないさい」というメッセージも込めることで、情操教育にもつながるだろう。

これで納得してくれるはずだ。しかし、娘はしたり顔で追及してくる。

「でも、いじめっ子のタクヤくんもプレゼント貰ったよ? いつも誰かの悪口言ってるエミちゃんもプレゼント貰ってたし。サンタさんは、あの子たちが悪い子だっで見抜けないの?」

くっ、我が娘ながらやりおる。タクヤくんもエミちゃんめ。悪い子のくせにプレゼントを貰うなよ。

「えーと、それはね……!」

返答に困っていると、娘は少しニヤニヤしながら、「ママ、いじわるしてごめんね?」

悪戯っぽい笑みを浮かべて、いつもの上目遣いで謝った。なるほど、コイツすでにサンタの正体を知ってたな。どうやら娘の方が一枚上手だったようだ。我が娘は、とても賢い。

# My Hero, Your Hero.

もうとっくに気付いていた。アニメやラノベに出てくるような主人公にはなれない。幼い頃は、小説などに出てくる主人公に憧れたし、仮面ライダーのベルトは種類そろえていた。勇気を貰い、情熱や努力の大切さ、色んなモノを教わった。カッコいい、俺もあんな風になりたい……。

でもそんなモノは幻想だ。幻想にすぎないのだ。高校生になり、ライトノベルなんかを読むこともあった。ファンタジー世界を大冒険して、出会った女の子たちに惹かれて……。都合の良い話だと思いつつも、どこかにそんな冒険を諦めきれない自分がいた。いつまで厨二病を引きずっているのかと自分自身を馬鹿にしつつも、高校生活を普通に過ごした。

安易にトラックに轢かれて異世界転生だとか、高校でラブコメが始まることもなく普通に大学に進学した。知識を蓄えることが好きだったし、いつでも異世界転生して内政でチートできるようにしたいと考えていたからか、ある程度レベルの高い大学に進学することができた。

この時点でもう諦めていた。

アニメは友人と感想を共有するために見るが、主人公への憧れは消えていた。普通に大学でGPAを稼ぎつつ、バイトやインターンで経験を積み就活をした。

就活も無事にうまくいって、そこそこの企業に入社した。社会人生活は忙しく、もはやアニメすら見なくなり、そもそも自分が憧れていた主人公たちのことなど思い出せなくなっていた。社会人生活を続けていく内にそろそろ身を固めるべきかと思いつき、大学の頃から付き合っていた彼女と結婚することにした。みんなのヒーローにはなれなくても、彼女を一生守れるようなヒーローであることを決意した。

子供が生まれ、両親に孫の顔を見せるために実家に帰った。早く結婚して孫の顔を見せると平日頃から言っていた両親は、とても喜び歓迎してくれた。昔の自分の部屋を見られ少し恥ずかしい思いをしていたら、妻が一つの紙を見つけた。自分の小学五年生の時の「しょうらいのゆめ」が書かれたプリントだ。その「しょうらいのゆめ」にはもちろん「かめんライダーみたいいなひーろー」と書かれていた。妻はそれを見てクスリと笑いながら言った。

「ヒーローなんかじゃなくていいから、これから先も私とこの子を守り続けてね!」

# My Hero, Your Hero.



# スノー・グラス

「そういうことだってあるのよ」

遠い記憶の中で彼女は言った。彼女の言葉は僕の心で渦巻く深い暗闇の中において確かな道を照らし出すことができた。捉えどころのない、そして相手を突き放すようでも発する言葉の一つ一つには肌で感じられるほどの温かさがあった。いったいどれほど救われたのかわからない。それは彼女がもういなくなってしまう後でも同じだ。僕はこれからも彼女の幻影と共に生きていくのだろう。いや、そうでなければいけないのだ。

「今日で5年」と心の中でつぶやいて、僕は彼女が眠る墓石の上に緑の青い眼鏡を置いた。目を瞑ると彼女との思い出が鮮明に蘇った。甘いシャンブーの匂い、髪質感、体の温もり。脳内の金庫の鍵を一度開いてしまえば、自動的に、そして強制的に思い出されてしまう。

目を開けて一刻前に置いていた眼鏡を見ると、レンズの表面には綺麗な球体の形をした一滴の水が垂れていた。僕は無意識のうちに膨大な記憶の中から6年前の冬の記憶だけを取り出そうとしていた。それは珍しく東京に雪が降った12月の話だ。今から6年前、彼女は23歳で、僕は何も知らない19歳だった。

彼女と僕は駅を目指して歩いていて、目の前の駅は白々と発光する蛍光灯の光を放っていて、妙な存在感と騒がしさを孕んでいる。

「あれ、東口だよ」

彼女の問いかけに、僕は目を細くして彼女が指す先を見た。

「何？ 見えないの？」

たった20メートルほどしか離れていない駅の案内板を読めない僕を見て、彼女は驚きと困惑の表情を浮かべた。

「あんな近くの文字も読めなくてどうすんのよ。じゃあこれは？」

そう言って彼女は僕の顔の前にピースサインを作った。

「2です。そのくらいわかりますよ。最低限普通の生活に支障が出ないくらいには見えているから大丈夫です」

「近くにある案内板を読めないことを人は生活に支障が出るって言うのよ」

僕が何も言えずにいると、雲の多い夜の空から雪が降りてきた。もうこの話はやめてくれという心の中の叫びが神様に届いて、話題をそらすために雪を降らせてくれたのだと考えた。救世主としての雪。それも悪くない。

僕たちは近くにあったベンチに座って白い雪を体いっぱい浴びることにした。僕も彼女も、雪が大好きだった。

「さっきの話だけさ。なんで眼鏡を掛けないわけ？ こないだ君がパソコンをいじってたときは、眼鏡掛けてたじゃない。持つてるんなら掛ければ良いのに」

どうやら雪は救世主でなかったらしい。むしろ、その逆だった。彼が引き連れてきた本格的な寒さによって僕はいつもの冷静さを欠いていた。

「授業を受けるとか、細かい作業をするときには掛けますよ。でも、それ以外では掛けたくありません」

「なぜ？」

「眼鏡を掛けていると疲れるんです。どうでもいい細部までくっきり見えてしまうというか。裸眼のままで見ると世界がぼやけて見えます。はっきりと見ることのできる手元と見ることのできない遠くの世界の間に境界線みたいなものがあるって、内側の領域は完全に僕の世界です。自分以外の何者も干渉しない、安らぎの空間。僕には必要なものです」

勢いに任せて言ってしまうと、段々と自分の頬が火照っていくような感覚があった。

迷惑な寒さをもってしても、それを抑えることはできない。

「きっと何か辛いことがあったのね。今は眼鏡持ってる？」

僕は素直に頷く。

「じゃあ掛けてみて。そして見るの。目の前にどんな世界が広がっているのか。大丈夫、私がいるから」

なぜだかわからないが、僕はどうしようもなくそこに何かあるのか確かめなくなった。そんなことを思うのは目が悪くなってから初めてのことだった。リュックから眼鏡を出して掛ける。彼女は僕の頬に自分の頬をくっつけて、そして手を重ねた。

矯正が入ると急に人工的な光が強くなったように感じられて、思わず目を細めてしまった。頭に付いた雪を払いながら小走りで駅に向かうサラリーマン、幸せそうに手を繋ぐ恋人たちに、ヘッドフォンで音楽を聴きながら寒そうに手をコートのポケットに入

れる青年。駅前には実に多くの、そしてさまざまな種類の人がいた。

「ほら、こんなに美しいの」

イルミネーションで飾られた駅前の光は、雪のせいもあってか今まで見たどんなものよりも綺麗に感じられた。

「ほら、こんなに美しい」

自然と出た言葉に気がつくことができなかった。それほどまでに、僕はその光景に見惚れていた。

「逆に私は少し疲れたかな」

彼女は目に入っていたコンタクトレンズを両眼とも外してしまおうと、僕の腕をしっかりと掴んだ。

「帰ろっか。私、裸眼の視力全然ないから誘導してよ」

僕たちがベンチから立ったとき、すでに雪は降りやんでいた。結局、僕が彼女を家に送るまで彼女は持っていたであろう眼鏡を掛けた。道中、彼女は眼鏡を人前で掛けるのが極端に嫌いと打ち明けた。その理由について尋ねても、特につかみどころのない返事が返ってくるだけだった。

「君に眼鏡を掛けない理由があるように、私にも眼鏡を掛けない理由があるのよ。それはあり得ないほど似合わないからかもしれないし、幽霊が見えるようになってしまっからかもしれない。でも、みんな同じじゃないでしょ？ 誰かが言っていたわ。全員が白人じゃ退屈でしょって。そういうことだってあるのよ」

彼女がトラックに轢かれて死んでしまったのは、それからちょうど1年くらいが経ったときのことだった。彼女の目がそのとき裸眼であったのか矯正されていたのかは僕は知らない。別にそのことを警察に聞こうとも思わなかったし、それを知ってどうなるんだという思いが強かった。

「ようやく決意が固まりました。僕はもう逃げませんよ」

自分の車に乗る前にコンタクト用の目薬を両目に点そうと思っ上を見上げると、今年最初の雪が天からゆっくりと降りてくるところだった。彼女からの贈り物としての雪。それも悪くない。





